

日向神社と奉納軍配

◇日向神社

宇留野には、旧宇留野村の鎮守日向神社があります。祭神は神日本磐余彦命（神武天皇）で、江戸時代の初めに水戸藩がまとめた『開基帳』によれば、日向神社が開かれたのは大永七年（一五二七）とされます。

日向神社があるのは県内で常陸大宮市

が唯一と思われ、大変珍しいものですが、残念ながら神社の縁起などは不明です。同名の神社では、京都山科の日向大神宮が著名です。こちららはもともと日向国（宮崎県）高千穂にあったものを京都に移したといわ



▲日向神社



▲宇留野城西側に残る土塁

れていて、天照大御神ほか三柱の神を祭神としています。

宇留野の日向神社は、宇留野氏の氏神とされ、宇留野城の主郭部分に築かれています。城が機能していた時代から、城内に祀られていたと考えられます。

宇留野氏は佐竹十四代義俊の四男義公に始まる一族で、宇留野城主となりしました。義公の子・義久の後は佐竹十六代義舜の三男義元が継ぎ、宇留野四郎と称しました。宇留野四郎義元は享禄二年（一五二九）、小貫氏から部垂城を奪い、実兄の佐竹十七代義篤との間で十二年に及ぶ戦（部垂の乱）を招くことになりました。この戦乱で、宇留野（部垂）の

当主義元は子の竹寿丸、小場義実と共に自害に追い込まれましたが、宇留野氏は佐竹本家側について義元を討したこともあり、存続が認められました。宇留野氏は慶長七年（一六〇二）の佐竹氏の秋田移封により、一部の人々は本家と共に秋田へ移住しましたが、大部分はこの地に土着しました。

◇日向神社の奉納軍配

日向神社に伝えられる宝物に伝宇留野氏奉納軍配（市指定文化財）があります。

軍配は、戦の指揮に使う「軍配団扇」の略称で、もともとは小ぶりの団扇形の面（「羽」という）に柄を付けたものでした。羽の部分には戦勝祈願の願文や天候の予想、方位の吉凶や合戦の日取りなどの占いに關する意匠（北斗七星や月など）が描かれました。戦の方法についての学問である軍学で、占いが重要視されたように、戦を指揮する軍配にもその意味が込められていたことがわかります。現在、軍配といえば相撲の行司が用いる大ぶりで柄の短いものを思い浮かべますが、それは江戸時代以降広まったものです。

常陸国総社宮（石岡市）の社室の一つ、佐竹義宣が天正期に奉納したとされる軍配（県指定文化財）は鞆製で金箔が施されたもので、羽の意匠は片面に種子と円形に配した十二支、片面には朱漆で日輪が描かれ



▲佐竹義宣奉納軍配（常陸国総社宮所蔵）

ています。吉凶を占うモチーフは戦国期の軍配に多用されていました。日向神社の軍配は二握あり、それぞれ全長が五〇センチ（軍配①）と四六センチ（軍配②）です。材質は木製で、羽の部分に鞆革を張り、その上から漆、金箔押ししたもの（①）と羽の部分に鞆革張りにし、漆塗りしただけのもの（②）で、どちらも無地です。羽の部分に後世の補彩と思われる跡も見られますが、戦国期の軍配の様子をよく残す、貴重なものです。



▲軍配①



▲軍配②

歴史民俗資料館大宮館
52-11450